想を抱かなくなつたといふのは、私も失張り忙しい、といふ人達の仲間に這入つて、落付く時が尠くなつた爲であらうと思つてゐる。

先づ、私は鏡に向つた時、その形の惡い鼻や眼――眼は三角だと前置きある通り――厚い變挺な唇　黑い肌の色、光澤の惡い髮毛、殊に口を開くと直ぐ眼立つ汚い齒並　まアほんとうに自分でも愛想のつきるような、恁んな醜い〳〵顏容姿を、よくも人中に、この輝やかしい明みの中に、毎日曝け出してゐられる。と思ふ。他人は嘸かし、この醜い私を嘲笑つてゐるだらうけれど、私はそれを知らないものだから、私は、私といふものゝ、この醜さ加減を知らないものだから、平氣で、平氣を通り越して、洒々と、他人達に接近してゐる。他人達は、屹度私に接近されたら、不愉快になるだらう。何故つて……私、この私自分でさい、不愉快になつて、何だか悲しい心持ちさへするのだもの……。でも他人達は豪い、と思ふ。そんな不愉快さうな表情もせずに、みんな親切に、私といふものを取り扱つてくれる、私はほんとうに、私以外の人達に感謝せずにはゐられない……。と、私は鏡の前で考へる。左樣して、この醜い顏容姿は誰人の爲せた業であらう？……親だ。兩親が恁んな醜い私に生みつけてくれたのだ。何程、白粉や、紅やクリームを塗つたところで、鼻が高くなつたり、眼が丸くなつたりは、出來ない、色彩で胡魔化さうたつて、元々造作の惡いのは、立派に化りようがないのだ……。詮方がない、だから、そんなことに時間と頭腦とを費さずに、外型が醜ければ、せめて內容をでも、豐富にして置かなければならない。內容のある人間、嫌味のある人物、といふことにでもなつたら、この醜い外型も尠しは、品がよくなつた、人品が出來て來た、位になるかもしれない。左樣だ外型なんか如何だつて構はない、勉强するのだ、修養するのだ……。と私は、鏡の前から去つて机の方に來る。

さて、机の上で勉强してみるが、いくら勉つてみても、矢張り頭腦が惡いから、駄目、何にも出來はしない。……『ほんとうに、私は無能な女だ。何にも能きはしない、何といふ生れつ

きなのだらう！』――と悲しくなつて了ふ。他人は、それだのに、よく恁んな私を親切に、觀てゐてくれる。全く難有いと思はなければならないのだ。

恁う、私は、私といふものに就いての觀念を、最も正しく、最も嚴肅な處に置く事が出來る。――落ちついた時、左樣いふ心に餘裕のある場合には……。けれど、これは、眞實に落ちつき得た時、よく自分といふものを考へ得られた場合のみであることを、私は何時も悲しく思つてゐる。

私が落ちつかない時、ようく、この私といふものを觀ることが能きなかつた場合には――左樣して、それが大抵の場合であるが――ほんとうに、私は更らに恁うした、自分といふものを知らない、愚かな、不遜な卑しい女となつてゐるのだ。

例へば、他人がちよつと他の女を賞めるとする。若しその女が自分も好きな女でれば兎に角、左樣でなかつた場合、私はちよつと、その女に對して、又その女を賞めた他人に對して、反感を抱くようなこともある。が、まだ私は、直ぐそれを口に出してべラ〳〵云ふ程になつてはゐない。

それから又他人が他人に向つて、自分の惡口を云つた、どきく。左樣いふ場合も私は腹が立つ、左樣云つた他人の、何か惡いことを直ぐに私は考へ出さうとする。又それを考へ出せば、その他人達にも幾何でもあるような氣持ちがする。それから、若しそのかげ口でなくて、向つて私を冷笑つたとする。――向つてズケ〳〵と忠告などしてくれる人は滅多にないから――そんな時、私は直きに口惜しくなつて、直ぐ何か云ひ返したくなる。云ひ返して先方を凹ましたくなる。又、他人が自分より何か、割のよい場合に立つたとする。そんな時も亦、ちよつと妬ましいやうな氣持ちがする。他人が自分に對してチヤホヤしてられることがある。私はそんな時、馬鹿に嬉しくなる。ほんとうに賞められてばかりゐるのか……、と、直き圖に乘つて了ふ。

凡べて恁んなことは、みんな私の落ち付かないフワ〳〵とした氣持ちの時に、續出して來る

私の心持ち、又行爲であるらしい。私は、ほんとうに後になつて、そんなことを考へると、この私といふものが恥しくて〳〵ならなくなつて了ふ。

醜い私、無能力者の私、生れ損つたようなこの私といふものを、私自身がつく〴〵悲しくなつて了ふ。よく〳〵今日まで憶面もなく。世間の皆さんの前に出てゐたものだ。と考へる。『いいちやん』と呼ばれて、信濃の山の中に、幸福に生ひ立つたあの頃から、『百瀬さん』と、その稱び方は何程か敬意は表されてゐるようでも、何處かに冷い感じのする、又は全く、きのふ今日の知り合ひで、何かといへば無責任な觀察でも向けられさうな、他人ばかりの中に、朝夕を過ごして生きてゆかなければならないこの頃の私でも、恁うした考へは、何時も變らずにゐながら、徒らに年老いて來て了つたのだ。三十年に近いその間、私は恁うした考を持ちながら、何故、それならそれで、自分でも恥しくない丈の、女にはなつて來られなかつたのだらう。それは、私に落ち付いて考へさせる時間が尠かつたからだ……。などゝ、辯解は能きない……。例へ、その考へる時間が尠かつたにもせよ、尠しでも考へる時間があつたとしたら、その時間の心持ちを何故自分は、何時什んな場合にも破らずに、亂さずにゐることは能きなかたつのだらう！

私といふものゝ、心の底には、兎も角恁うした反省の、自らを知悉しようとする閃がありながら、いざ、何事かに打つかつた場合には、忽ちそれが、搔き亂されて了ふのが多かつたのだ。つまり私は堅い或信念が無つから……精神の統一が不足してゐるからである……。と私は考へ得られる以上、私は飽く迄その氣づいた自分の欠點に、改善進歩の鞭打つてゆかなければならない。左樣だ！　私はほんとうに、恁んなことをしてはゐられない。浮々としてたゞ毎日を送つてゆく譯にはゆかない。一歩〳〵確實に、私といふものゝ精神修養をして、自ら顧て決して恥しい念や、悲しい心持ちの湧き上つて來ないように爲なければならない。

と、それで、私は、この頃の忙しない、心と生との挑み合ひのうちからも、考へながら、こ

の尊い月日を送つてゐる。

果して、私といふものは、恁うした心の養ひから、何時、神の子に近い女となりて終ること が能きるであらうか……。けれど、私は屹度、左様なつてみようと思つてゐる。

櫻井鈴子様へ

鈴子さま。

箱根小涌谷からの御葉書は、今朝拜見いたしました。東京は昨夜から、もう五月雨らしい、小雨が、しとゝと降つてゐますので、美しい繪葉書の繪と、あなたの達筆な萬年筆の走り書きの一端とは、やさしく浸んでゐましたが、私はその浸んだ痕にぢいつと視入りながら、これが今おなつかしいあなたのおいでなさる、小涌谷邊り、箱根の雨に濡らされて來たものか、但しはこの都會に入つてから、そこら邊りの雨の雫に浸まされて來たものか。……と思ひながら私は何時までも〳〵、お葉書を手にしてゐたのでした。左様して、あなたがもう、その山の湯の宿に一月餘りを送られて、東都の空がなつかしい……と書かれてあるように、私はその山の湯の宿の邊りがなつかしく、引いて、あなたといふ方が、私の心に、私の眼に映つたころのことまでが、何となしに懷しくなつて來たのです。

櫻井鈴子様――。恁ういふお名前が私の心に映つたのは、もう餘程前のことでした。それはあのAさん――御存知でございませう――。が、初めてあなたのお寫眞を持つて來られて、これから或雜誌にこの鈴子夫人の記事を書くのだ。と云つてゐられた時、私は初めてあなたの御身分や御性格や御趣味やを、茫然と頭腦の中に畫き出されたのでした。その時のあなたの御寫眞は、派手な花模様のお單衣でおとなしやかな、束髪に結げられた半身のと、何ですか白ほいレースで綺麗にお胸の邊りを、飾つた型のよい洋裝で、お顔の横向きのと、何れもそれは七分

位のお寫眞でした、左樣して私はその時あなたが、或西洋婦人と、帝劇の廊下などをよく伴れ立つて歩かれてゐるとか、佛語が堪能で、文學趣味に富んでゐられるとかいふような、Aさんのお談から、『ほんとうに綺麗な婦人！』とAさんが、思ひ出したように、獨言つように云はれたのにも、私はたゞ『……お金でもあつて心配がなければ綺麗にもなりますわ……』などゝ、今考へると、捻くれ心の女の云ひさうな言を云つて、一向あなたといふ、方に對して冷淡であつたことを――。又その時『……それァ左樣ですね……。自家の細君なんか、可愛想に、貧乏ばかりしてゐるから……』なんてAさんも私に同意して了つて、貧乏と戀とに歌つた御自分の鬱憤の餘りを、まだそこで洩らされたりしたことも、私はよく覺えてゐます。

その後、暫時經つてから復た、あなたのお噂を伺つたのは、あのKさんからで、その時、私はまだお目に懸らないあなたの近狀を、ちよつと他處に書いたりしたこともありました。

まァ、こゝまでは私があなたといふ方を、たゞお噂に丈伺つて、茫然と描き出されてゐる鈴子樣であつたのでした。が、ほんとうにあなたにお目に懸ることの能きましたのは、それからずつと經つた昨年の秋でございました。ね？　私はあなたに……あなたの大井のお住居へいきなり電話をおかけして、あなたに、何々……のお談を伺ひたい。と無躾にもお願ひ申しましたその時、あなたは電話口に出ておいでなすつて、『けふは忙しい……。けれど、如何でもけふでなくてはいけないといふのなら、日本橋の何處そこまで行くから、そのかへりに或家から電話をかける。左樣して其處でお話しよう……。』と、お返辭下さいました。で、私は先づその日の自分の公務も、これで一つ果せるのだ。といふような、まだあなたに對しては、一向冷淡な、普通の新聞記者らしい心持ちで、お待ちしてゐました。――やがてそのお約束の時間が十分ばかり過ぎた、と思ふ頃、社の編輯局の私の机の上に、一枚の紙きれを給仕が持つて來ました。私は何氣なくそれを見ると、『御都合が宜しくば直ぐ御一緒に……今御社の前でお待ちしてゐますから……』と、鉛筆で認めてあるではありませんか。私は急いで階下に降りて行くと、玄關

には小柄のちよつと品のよい運轉手が立つてゐて、直ぐ私を誘ひました。

私があなたを初めて御見かけ申したのは、その時で、あなたは藤色の夏襟に、その白い美しい面を一層榮えさせて、にこやかな微笑のうちに、殆んど夢中に私を自働車に乘せて、銀座街頭の柳のかげを、新橋の方に向つて走らせなさいましたね。

私はその時、ほんとうに、やう〳〵これで明朝の新聞の記事が出來た、といふような冷い心持ちは全く去つて了つて、たゞあなたとは、もう長い間のお交際であつたような親しみと懷しみとを、自然に抱くようになつて了つたのでした。『……一度Aさんがあなたを伴れて遊びに伺ひませうと、何時か云つていらつしやいましたが……』などゝ、あなたも亦、私に云つて、打ち解けた風にいろんなお話をして下さいましたつけね。――それは、初秋の頃のこと。それから大井のお邸へ伺つて、繪のようなあなたのお居間に、ふつくりとした友禪縮緬のかけ布團の、置き炬燵に向ひ合ひながら、お鰻は何處のが美味といふようなお談までし合つてから、夕方にはまた自働車で、京橋の風月まで來て、そこで、何時ぞやの西洋婦人ときいてゐた、ペーリングトン夫人にお目に懸り、またいろんな面白いお談に耽つたことなども、私はようく覺えておりますの。

兎に角、あなたには私は大變御世話にもなり又私も何時もあなたをお懷しく存じ上げてをりますのにも係らず、あなたがこの春、御病氣で入院なすつてから、私は一度もあなたをお訪ねしてゐませんことを、ほんとうに〳〵、濟まないと思つてをりますの。この間はまた音樂會の切符を難有うございました。たしか、まだ私はその御禮狀もさし上げないでゐたような氣が致します。……何か戴く時はさつさと戴いても、後の御禮は遂失念してゐるといふのが、私のどうも癖らしくて、あの小笠原伯の奥樣などからも、ちよい〳〵お芝居の切符などお送りして戴いても、後ではその時觀て來たお芝居の方ばかり、よく覺えてゐながら、御禮を申上げるのは屹度忘れてゐるのですもの……。ほんとうに自分ながらあきれ果てゝ了ひますわ。

芝居と申せば、今月は何處も、ちよつと面白さうでございますよ。もう御靜養もお濟み遊ばしましたのなら、お早くお歸りになりませんか。……お目に懸りたうございますもの……尤も御主人樣の御都合もおあり遊ばしませうけれど。……まアお早くお歸京り遊ばすことをねんじております。

隨分つまらないことを長々と書きました。又都會に面白いことがありましたらお知らせ申すと致して、今日はこれで筆を擱きます。どうぞお身體を御大切に……では失禮いたします。

さようなら

對話　水の上

水に面して、二個の窓が開いて居る。窓と窓との間は、厚い壁に仕切られて居て、窓から窓を見る事は出出ない。その代り、極めて靜に淸く澄んだ鏡の如き水の上には、窓の中の人の顏が、明に映つて見える。

時は秋の夜で、靑黃色く光り輝やくまどかな月は、水の底迄も透き通す程に、美しく下界を照して居る。

（靑年右の窓に顏を現はす）

靑年。あゝ、今宵も月は美しく水の上を照して居る……。今宵は丁度滿月だ……毎晩斯うして月の光を賴りに、二人は水の上の顏を見交はして來た。けれども明日の晩からは、最う月は段々と缺けて行く。二人の顏の影も薄れて行く……。そして、あの恐ろしい闇が四邊を包むやうになれば、二人は最早、その顏を見交はす事は出來なくなる。唯聲を賴りに、二人は、互に壁一重を隔てた窓に來て居る事を名乘り合ふに過ぎない。そして、二人の燃ゆる思ひが段々募つて行くといふ事を語り合ふに過ぎない。あゝ、月は、何故、毎晩缺かさずに、この

世を照さないのだらう？　何故闇夜といふ、恐ろしいものがこの世にあつて、吾々二人の戀を妨げるのだらう。否々、然し闇夜があつて、二人が互に顔を見交はす事がなければこそ、互の思ひは、燃えるやうに段々募つて行くのだ……。否々、矢張り、月夜が戀しい、薄い爪の跡程の月の光りに、ぼんやり浮んで見える二人の顔が、夜を經るごとに、段々明るく見えて行く樂しさは、何物にも換へる事は出來ない……（間）おゝ、今宵も最早、彼の女の顔を見せる頃だのに、未だ眞黑な地獄のやうな色をした窓の四角い影許りが、水に浮んで見えて、居る。何うして、今宵は顔を見せるのか、こんなに晩いのだらう？　父親にでも、何か用事を云附けられて、心ならずも、その方に身體を縛られて居るのでは無からうか？　月は吾々の心も知らないで、あんなに、あんなに急いで雲の波をかき分けて西の空に去つて行く。この月の光りの薄れぬ内に、あの白い顔を水の上に映してくれゝば好いのに、斯うして待つ間の一瞬間は、本とに平常の一年にも當る……。あゝ、月はあんなに急いで西の方に走つて行く。あんなに、羊の毛のやうな雲の間を、かき分けて進んで行く。

（娘左の窓に顔を現はす）

青年。（狂喜して喜び）おゝ！　私は、貴女の來るのを、待ちに待ち焦れて居ました。何うして今宵はこんなに晩くなつたのです？

娘。（力なげに）用事があつて、晩くなりました……。嘸貴方は御待ちになりましたらうね？

青年。えゝ、最前から私は待ちに待つて、待ち焦れて居ました……。用事とは、何んな用事だつたのですか？　何か心配な事でもあつたのではありませんか。

娘。えゝ……（考へ込む）

青年。（窓から顔を乘出すやうにして）えゝ？　何うしたのです？　何か心配な事でも起きたのではありませんか？　大變心配相な顔が水に映つて居ますが……

娘。（袖を顔に當てゝ泣く）

青年。(ます〳〵心配氣に)もし〳〵。然う泣いて許り居ては解りません。何うぞ、語つて下さい。何んな心配事ですが？　私にも、その心配が分けられる事なら私にも分けて心配をさせて下さいな。

娘。……妾はこんな心配事が起らうとは、今日の今日迄思ひ設けませんでした。否々、此樣な心配な話しが、妾の耳に入つて來やうとは、夙くから思つて居たのですが、こんなに早く父の口から聞かされやうとは思ひませんでした。

青年。(せきこんで)そして、その心配な話しといふのは何んな話しなのですか？　何うぞ、早く語つて下さい。

娘。……貴方、妾は最う他へ嫁に行くやうに、親達に定められて了つたのです……(袂を顔に當てる)

青年。斯ういふ……斯ういふ事が、是非一度は貴女の身體に降つて來やうとは、思つて居ましたが、こんなに早く起きて來やうとは、全く豫期しませんでした……。貴女は、それでは嫁に行くのですか。

娘。否え……。妾は他へ嫁に行く位なら、死んで了つた方が好いと思ひます。

青年。でも、親に對する義理だとか、何だとかで、貴女は何うしても承諾しなければならんのでせう。

娘。妾が承諾するよりも先きに、親は最う妾が行く事に決めて了つて居るのです。

青年。そんな事が？　そんな事があるものですか！……それで貴女は何うするのです。

娘。妾は嫁には行きません……。

青年。行かない事か出來ますか？

娘。……(顔を再び俯向ける)

青年。おゝ、貴女は又顔を俯向けた……。最う今宵のやうに、貴女の顔を明かに見る事の出來

る月は此の世からなくなるでせう、何うぞ、その顔をよく見せて下さい……。今宵限りで貴女の顔は、最う永久に見る事が出來なくなるのです。

娘。否々、妾は貴方の御顔を見ないでは、一日でも生きては行かれません。

青年。と云つて、貴女が他へ行つて了へば、最う永久に貴女の顔は見る事が出來なくなるではありませんか……。

娘。(強い決心をもつて)否々、妾は他へ行く程なら、生きては居りません……。

青年。けれども、貴女の運命が嫁に行くやうに定められたのなら、最早何うする事も出來ないではありませんか?

娘。最う、今宵限りですから、この、この間の壁を取つて、しみじみと、貴方のお顔が見たう御座います。

青年。おゝ、この間の壁! この間の壁を取つて、二人か顔を見合はす時には、二人の生命は最早なくなるのぢやありませんか?

娘。えゝ……

青年。何といふ情ない吾々二人でせう? この恐ろしい壁に隔てられて、吾々二人は、未だ本とに互の顔を見合つた事はないのです。このやうな月夜月夜に、水に映る影を眺めて、せめてもの慰めとして來たのだ。最う貴女は永久にこの水の上に顔を映す事はなくなりました。假令、この先き幾晩今宵のやうな明月が室を照しても、貴女の窓には、その白く、美しい貴女の顔が映るといふ事はなくなりました。只地獄の色をした、眞黑な影が映る許りです、私はその恐ろしい暗い影を見て、何うして、この先き生きて行かれませう? 思つてもぞつとします。私は最う、今宵限り死んだ人間になるのです……

娘。けれども……貴方は本とに妾の爲めに死んで下さる御心にはなれないでせう? 男といふものは皆然うですから……

青年。もし、少し待つて下さい。私の返事を聞かないで、然う決めて了うのは殘酷です。私は貴女の顔を見ないでは、この先きとても生きては居られないと云つて居るではありません か？

娘。でも、それは本心から然う仰るのですか。

青年。口先許りの嘘を云つた事は、生れて未だありません。

娘。……

青年。貴女は何を考へて居るのです？　貴女こそ、今になつて躊躇して居るのではありません か？

娘。否え、妾は、最前父からその事をいはれた時に、最う生きて居やうとは思はなかつたのです……（間）この清く澄んだ水の底にも、世界はあるのでせうか？

青年。えゝ、吾々二人の樂く暮す世界は、ちやんとあります。この水の底の世界は、初めて吾々が顔を浮かべた時から、吾々の早く來るのを待つて居たのです……。この少しの塵も穢れもない水は、丁度吾々の心――戀のやうなものです。

娘。この水に入る時は、二人は本とに顔を見合ふ事が出來るのですね？

青年。えゝ本とに見合ふ事が出來るのです。そして、永久に水の底で、吾々二人は顔を見合つて居るのです。この月よりも明るい光りの内で……

娘。（喜ばしげに）それでは　早く水の上に降りて行きませう。

青年。月があんなに悲しげに笑つて居る……　月の光りが薄れぬ内に、早く水に降りませう……

……

（二人窓に手をかけて降りかける――月雲間に入つて四邊朦朧となる。

（了）

小說

譫言

電話の鈴や、人々の雜談や、兎角ざわ〳〵として落ちつかれない處に、七時間及至八時間づゝの公務をすましてから、一人靜かに自分の寓に歸つて來る時が、終日の中で光子には最も愉快な時刻であつた。

其日も、夕暮れの空は美はしく星の光に瞬いて、風も快く落ちてゐた。

光子は何時ものやうに、銀座街頭の明い灯かげを踏んで、電車や自働車や、行き交ふ人々達の、雜然とした街路の中に、ひとり暢然としたこゝろを抱いて、靜かに足を運んでゐた。

——これからが、もう私の自由な時間だ。私のほんとうの生活に入るのだ。

恁う思つて、光子は自然に微笑まれて來るやうな氣持で何時か寓に歸つて來た。

寓は賑やかな街からやや離れた横町の露路のうちにあつた。光子は暗い足場の溝板を踏みしめながら、一番奥の自分の寓から櫺子窓を洩れて明く露路に流れてゐる灯光を見ると、何とも云へない嬉しさを覺えた。森として快い靜かさのうちに、朝出た時のまゝに、まだ寓の中はキチンとしてゐるであらう。長火鉢にかけられた鐵瓶の湯は、程より温んで此女主人の歸りを待つてゐるであらう。机の上に飾られた戀しい亡母と、可愛い吾兒の寫眞とは、けふも亦無事に公務を果して來たことを歡び迎へてくれるであらう。左樣して今宵も亦一人で氣のまゝに好きな食事を取つたり、讀書をしたりしてこゝろ安い睡眠に就かう……。他人はよく孤獨で寂寥ではないかと訊く。けれどその寂寥も、閑寂も、普通の家庭には必らずつき纏つてる、さまゞゝな煩はしさに比べたなら、自由といふ貴い難有い文字の中に、何もかも打ち消されて了ふのだ。

光子は恁うした、他人には解らない愉快なこゝろを抱いて、何時も無造作に挿し込んでゆく勝手口の釘を抜いて寓に這入つた。寓の中は果して、此女主人の意の通りに整つてゐた。光子は例のやうに庭先の雨戸を繰つてから上着丈を着替へると、先づ長火鉢の前に坐つて、朝活け込んで置いた火種をかきならした。そして傍の茶簞笥の上から湯呑を取らうとして左手を延ばした時、彼女の視線は、ピタリと其方に向けられたまゝ動かなくなつた。

『……どうしたのだらう。今朝此處に載せてつた筈だが……。』

光子はきのう青森の方の友だちから、美事な林檎を屆けてくれたのを、三つばかり其處に出して置いたのか、まるで失くなつてゐるのを、不思議に思つたのだ。

『……鼠かしら、あんな大きなものを……だけど鼠もなか〳〵巧者だから……。』

溫い茶湯を殆んど無意識のうちに呑みながら、光子はそれが食べ物だから多分鼠の仕業であらうと考へた。そしてもうそんなことは忘れて了つて、今夜は早く錢湯に行つて來やうと、次の間の鏡臺の、前に蹋んだ時、復た彼女は一つ考へなければならないことに遭遇した。

何時も鏡の端にかけられた美しい兎の毛で拵へた牡丹刷毛が失くなつてゐたから……。

『……それとも何處かへ仕舞ひ忘れたのかしら』恁う思つて、其處邊を探してみたけれど、何處も他のところはキチンとしてゐた。

これも矢張り鼠だらう、今に出て來るかもしれない……。光子はさつさと錢湯に行つたり、他の用事をすましたりして、その晩は寢て了つた。

數日は經つた。

光子は毎日愉快に、毎日變動しない平和なこゝろを抱いて、毎日の公務と、自分の時間とに別々な希望や光明をよせて、そのこゝろのすべて緊張さを缺くまいとつとめてゐた。左樣して何時ものやうに夕暮れには、樂しい念を抱いて寓に歸つて來た。

が、復た或日、光子は鼠の仕業で考へなければならなかつた。そして、それはもふ鼠の仕業にしては余りにかけ離れた仕業であつた。派手な色彩の博多の伊達巻や、絞染の帛紗などが失くなつてゐた。恁うした鮮かな色彩のものばかりが失くなるところを考へると、何れ頭の黒い鼠であらう。左様して多分年の若いまだ小娘といつた方の鼠であらう。左様手間を取つてゐずにコソ〳〵僅かな時間に、一寸眼についた品物丈盗つてゆく近處の鼠であらう……。と、光子は考へた、併しまた彼女は、自分は可なりに、ものゝ忘れぽい人間であるから、何處か戸外で落したのではないかとも思はれた。忘れぽい上に忙しいからだの自分は、例へ鼠でも。まして頭の黒い鼠をなど、疑ふはよろしくない。自分は自分丈でその不注意を氣をつけなければならない。伊達巻でも帛紗でも、屹度其處邊に出し放しにして置いたからだ。……けれどまた他人の寓へコッソリと這入り込む者があるとしたら……光子は、たゞ忍び込まれるといふこと丈でも、その無氣味さを感じない譯にはゆかなかつた。考へれば女の一人住み。それは、成程、不用心なことであつた。光子も亦最初は此不用心や無氣味さを想つて、せめて表の格子戸に錠前をつけて置いたらば……と、坂田の細君にも云つたのだつた。

＊　＊　＊　＊　＊

もと、光子は此家を自分で借りたのではなかつた。坂田といふ光子には母方の縁者が、此家の借主であつたけれど、主人が當分留守になつたから……といふ譯で、彼女はその二階を借りたのだつた。

坂田の細君は極寒に入ると間もなく鎌倉の方へ避寒した。

『何時もは此家を釘づけにして行きましたけれど、此年は貴女がゐて下さるから、表の格子戸へ錠前をつけて置きませう。』と、云ひ〳〵してゐたが、まだ褌の要るやうな、兒供をつれて、暫時を他處で暮すのには、それ相應な買物や手廻しのために、遂、細君は錠前のことは忘れてゐたらしい。

『あゝ、此處へ錠前を拵へて置くのでしたつけね。どうしませう？』

細君はその發際の朝になつて、やつと思ひ出したように恁う云つたが、

『……何、そんなことは私が後でしますから、心配なく發つてゐらつしやいな。』

光子は誰も氣の急く旅立の朝を、殊に兒伴れの、細君を悠然發たせ度いと、思つて恁云つたのだつた。

二階が六疊と三疊で、階下が八疊と二疊の左樣廣くはない家だけれど、光子は急に一人住みになるといふことが、伺となく氣味惡く思はれて、早速家主の棟梁に訊いたのだつたけれど、表の格子戸には硝子戸が篏つてゐるので、ちよいと巧くは錠前もつかなかつた。

『何に、此處は極く用心のよい處ですし、それに私とこも直ぐ恁う喰付いてますから……。此處に一本釘を挿し込んでお出かけなされァ大丈夫でさ。』

棟梁は恁う云つて、勝手口の戸へ釘を一本挿し込むやうにしてくれた。

成程、左樣いへば此處は用心のよさそうな處だ。それに、晝間自分が寓を空けるやうな時には棟梁の普請小屋にも、二三人の弟子達は何時も働いてゐるし、又一方は壁一重の隣合せにな つてゐるのだから……。と、その氣にもなつて平氣でゐたのだけれど。……

＊　＊　＊

もしや、これが自分の失念か鼠の惡戯でないとしたら、誰人が、此寓へ忍び入つてそんなことをするのだらう……近處の若い娘……といつた處で、家主のところには、貰娘があるけれどあの娘がまさかそんなことを爲やうとは思はれない。隣家に十七八の小婢がゐる。他人の上に疑惑をかけるとしたら先づ隣家のそれより他にない。と光子は思つた。

一體隣家といふのは、光子が此處へ越して來た時から、何だか氣に喰はない家であると思はれてゐた。……それは朝、暗いうちから何でも五十餘りとも思はれる女の、嗄れた、太い聲を張り上げて、矢鱈に兒供を叱り飛ばしたり、若い男や女を相手にして淫猥な談に、邊り近處へ

の遠慮もなく笑ひ興じたり、又は夜おそく、他處ではもう寢靜まつた時分に、面白くもない蓄音機を初めたりして、靜かにものを考へることの好きな光子には、をり〳〵堪らなく厭な念をさせられるのであつた。左樣してそれが又、娘をみんな藝者に出して、今、家にゐるのはその父無兒か何ぞだと、聞いては光子は一層、厭な〳〵隣家であると思つた。が、をり〳〵晝間ボツン〳〵といつたような覺束ない、三味線の音がして、

『お前、左樣ぢやないんだよ。忘れつぽいネ……』とか。『……あゝ左樣かえ。それァ巧くやつたネ。あゝそれから……フム〳〵、じやすつかり其つもりでゐるんだネ。甘い奴ネ……ホヽヽ。』

などゝ、ボソ〳〵とした談聲のうちから洩れて來る言葉で光子はまた面白いことに觸れてゐるやうな、或好奇心を有つて知らずに耳を傾けてゐるやうな時もあつた。……が、何でも察するところ、その母親の方が藝も腕も凄かつたらしく、氣のよい娘が實家へ時々來てはお客に對する腕を敎はつたりするのだらうと思はれた。――ほんとうに世間にはいろ〳〵な人間が住んでゐる。あの母親も今迄にどんな生涯を通つて來たか知れないけれど、金より大事なものがないあの人達には、至極幸福者らしくも思はれる。欄干に乾される夜具布團も絹布づくめで、燻んだ重着の胴抜きには、燃え立つやうな緋の役者の紋散らし絹を取つたのなども、その若い時の腕の冴えが偲ばれるやうで、おもしろいと、思つた。けれどガン〳〵と吐鳴り散らしたり騷がれたりすると、又堪らなく厭な氣持ちもした。其上に隣家ではよく此家の所有物を無斷で使つてゐたりする。芥箱の上に立てかけて置いた草箒がないと思へば、屹度その婢が汚い溝の中を掃いたりしてゐる。二階の物干が一本足りないと思へば、その母親が孫の筒袖を乾したりしてゐるのだつた。

『隣家ァ何時だつて留守なんだネ。あの女は何だらうネ？　お前よく見たかえ？』

『よくも見ませんけれど、何でも毎日お晝前に出かけてお夕飯頃には歸つて來ますよ。そして面白いハイカラに結つて……。何だかツン〳〵した女ですね。』

『あゝ、オッに高ぶつてるんだよ。』

母親と婢とがこんなことを云ひ合つてるのも、光子は默つてきいてゐた。晝前に出かけて夕飯頃に歸宅て來ることを知つてゐるあの婢は、若し此家へ這入るのと、したら其間に、そして隣家でもよく家を空けるやうだから、コッソリ一人で來てみるのかも知れない。光子はその紛失つた器物が惜しいといふよりも他人の留守に忍び込まれるといふこと丈でも、厭な氣持ちがした。が、彼女はまた一日でもそんなことのために、大事な公務を怠るといふことも能きなかつた。

或朝、出がけに彼女は一枚の半紙に大きく恁う認めて、それを勝手口から這入つた正面の壁に貼りつけた。

『他人の留守に此家へ這入り込んで、何かを持ち出すのは誰人ですか。』

光子は自分ながら、馬鹿氣たやうな氣持ちのされる此貼紙を可笑しくも思つたけれど、それでも此家へ忍び込まれたを、知らずにゐるやうな呆然者でないと、氣づかれる丈でもよいと考へた。恁うして置いて、光子は毎日規定の時間に出かけては歸宅て來た。が、此貼紙は其功果を奏したのか、奏さないのか、兎にかく寓の中はキチンと朝のまゝになつてゐて、何の變つたこともその後見當らなかつた。

貼紙はそのざら〳〵とした壁の面に糊が次第に乾いて來て、上部の方から剝げかゝり、毎朝便かう塵拂ひの尖に、それが觸り〳〵しては、遂に全く剝げ落ちて、箒の尖にかけられ、何時か丸められて屑籠の中に入れられて了つた。

光子はまた、毎日の身や心の忙しなさに追はれて、忘れ果てゝ幾日かを暮したのであつた。

*　*　*

『おばさん。けふはお休み？』

『えゝ、遊んでゐらつしやいな。房ちやんもお針の方はおやすみなの？』

『もう行つて來たの。おばさんまた此間の繪本みせてネ。』

家主の貰娘はよく光子の處へ遊びに來てゐた。光子も亦餘暇な時には此娘をよく遊ばせてやつた。娘は今年十五で名前を房江と云つた。棟梁の内儀さんは貰娘ではあつたけれど、其娘の父親が何か性のよくない男とかで、母親はまたそれを歎いて、永い間患らつて死んで了つたといふ。可愛想な、その娘の身の上を思ひやつて、實子のやうに可愛がつてゐた。娘も亦そんな繼子らしい性質は更らに見えない、至つて優しい性であつた。

坂田の細君がゐた時分から、娘は光子の部屋へ折々やつて來たが、光子が一人になつてからは、一層氣兼ねもないらしく、娘は家中を自由に自分の遊びどころのやうにしてゐた。光子もそれが却つて氣に入つて、なるべく自分の休みの日などには此娘と遊んで暮さうとした。

『ねー。おばさんとこにある品物はみんなハイカラネ。私氣に入つちやつたわ。』

など丶娘はよく老せたもの丶云ひ方をして、光子の本箱の上や、簞笥の上に飾られたいろいろなものを飽かず眺めたりしてゐた。

『左樣！　そんなに氣に入つたのなら房ちやんのことだから、一つ上げませうかね。』

光子は餘り娘が欲しそうな顔付をしてゐる時は、そのまゝ何かを與へて娘の喜ぶ顔をみやうとした。娘は遠慮しながらも嬉しそうに其品を手にしては、内儀さんの處へ歸つて行つた。

『まア、こんなに結構なものを頂戴して來て……、またおば樣にお强請申したんだネ。房ちやん、お前困るぢやないか……。』と、内儀さんは、光子へは氣を兼ねながらも、娘と一緒に包み切れない、嬉しさを見せて、恁う云ふのが例であつた。光子も亦かうして、他人に歡ばれるといふことは、矢張り好きであつた。考へれば光子も亦可なり寂しい。そして悲しい境遇であると、思つた、殊に血肉の緣の薄い彼女は、恁うして他人でも心から懷いて來れば、親しさ、可愛さは日に增して來る……。光子は毎日、寸時でも此娘を見ないと、氣が澄まないやうにも思はれてゐた。けれど、自分には公務があるし又、娘の方にもそれ〴〵の用事があつた。娘は朝早

く起されて、ひとりで手間を取つて、身の廻りを支度をしてから、お針の師匠の許に行くと、午過ぎの三時か四時頃でなくては歸宅つて來なかつた。そして夕方は、母親と共に、父親が晩酌の支度や、若い者達への夕飯の手傳ひなどをさせられると、彼女はもふ直きに疲れて了つて自分の食事が終ると、夜は早く床に入つて了ふのが平常であつた。其爲に光子と娘とは、双方で思ふ程に、何時でも一緒に遊んでゐるといふ譯にも亦ゆかなかつた。

『どうしたのだらう！。今日でもふ三日、四日、五日もあの娘と逢はない……。何處か工合でも悪いのかしら、尤も私の方も忙しかつたけれど、娘の方でもちと、來なさ過ぎるやうだ。今晩は此方から一つ迎へに行つて見ませう……』

光子は其日、例時よりはやゝ早く、公務の方が片づいたので、恁う考へながら、急いで寓の方に歸つて來た。そして例の細い露路へ這入つて來た時、不圖、寓の前に誰人か立つてゐるのに氣づいた。が、だん〳〵近よつて來ると、いつも見なれた桃割れの頭髪に、紫の前垂れも眼に入つて、それは家主の娘であることが判然した。

『オヤ、房ちやん、暫時ね……。』

恁う、光子は咽喉のところまで、轉び出しかけた言葉をぐつと、飲み込むやうにして、ソツト、抜き足をして背後から、娘に近よると、急いで、ギユツと、其娘の肩を抱きしめた。

『アツ。』と、娘は、さも吃驚したように叫んで、思はず、ブル〳〵と身震ひをした。そして、慌てゝ此方を振り向いた時、その顏色は眞蒼であつた。

『どうしたの、房ちやん、』と、光子は、此娘の驚き樣が餘り酷かつたので、却つて此方が吃驚したように、娘から其手を離して、云つた。娘はまだ、眞蒼な顏をして、その小さな手を胸のところにやつてゐた。

『まア、そんなに吃驚したの？　悪かつたわね、堪忍して頂戴よ。だけれども、また私はね、

丁度、房ちやんのことを考へながら歸つて來たとこなんでせう。だから嬉しかつたんですもの……。』

光子は、努めて元氣よく、そして、娘を力づけるやうに、歡ばせるやうに、恁う云つた。

『私のことを、おばさんは何と思ひながら、歸つてらつしつて？』と娘はやう〳〵、氣持も少しは落ちついた風で云つた。が、何時ものやうに、可愛らしい笑靨のよる笑顔はみせずに、たゞ、凝乎と、光子の顔を視まもつてゐた。

『何てつて、だつて、此頃房ちやんが一寸も來なかつたんですもの……。だから、おばさんは、今日は御用も早く濟んだから、房ちやんを迎ひに行かふかと思つて、歸つて來たのよ』

『左樣！　ほんと？　おばさん』

『え〳〵、ほんとうですとも。ですが、此頃どうかしたの？　病氣だつたの？』

娘は頭を振つて、

『私、御用があつたり、したもんですから――。』と、云つて、そのまゝ頸垂れて了つた。

光子は何だか、今日は此娘の容子が最初から、變つてゐるやうにも思はれたけれど、それは今、自分があんなことをして、驚かした爲であらう。と思ふと、また一愛可愛そうな氣持ちになつて、今夜は寓へ止めて、何か娘が歡ぶ丈のことをしてやらうと考へた。

娘は、光子の云ふまゝに家の中に這入つて、長火鉢の前にキチンと坐つた。

『房ちやん。何か喰べたいものはなくて？　何でも御馳走して上げるわ。房ちやんの好きなものをネ。』

光子は一生懸命で、もう螢火程になつた、火種を黑い炭の上に載せて、吹きながら訊いた。

『え〳〵、有難ふ。でも、私、又伺ひますわ』

『あら、どうして？　何か御用があるの？……』

『ぢやァ、遊んでいらつしやいな。二人でまたおもしろいことをして遊びませうよ。』

『……』

『どうしたの？　今日は大層元氣がないのね。そして、何だかそんなにして……まるで、何時もと違ふ房ちやんのやうね。』

娘は、それでも默つてゐた。光子は變に思ひながら、やう〳〵微かな、好い音を響かせて、湯氣を立てゝ來た鐵瓶の湯で、娘が何時も歡んで飲む、甘いコ、アの入つたミルクを一杯、拵へてやつた。

『ねー、房ちやん。どうせおばさんは今外へ買物にゆくのだから、あなたのいゝものを誂へて來て上げてよ。仰有いな……』

何時もは何か外に買物のある時などは、此娘が歡んで、一走りして來てくれるのだけれど。……と、光子はまた考へられて、たゞ娘の顏色を窺つてゐた。娘は、光子に顏を見られることが、さも心苦しいといふように、下ばかり向いてゐたが、やがて、ふいと、立ち上ると、

『おばさん。また來るわ、ね。』と、少しおど〳〵した容子で、相手の顏色を、これも窺ふやうな調子で云つた。光子は、もう先刻から此娘の、浮かない樣子を見せられて、御機嫌とりには少々飽み果てゝもゐたので、こんな時、なまじつか引止めるよりは、と。

『ぢや、また被入いな』

恁う云つて、立ち上つて、彼女を送つて出やうとした。娘は、屹度、まだ何とか云つて、引き止められるだらうと、思つてゐたのが、恁う素直に出られたので、またちよつと氣の拔けたやうな氣持ちらしかつたが、玄關の上り框のところまで來ると、娘はふりかへつて、

『ねー、おばさんは、あの、私のことを何とも思つては被入らなくて？』

『何を？　別に、何とも思つてゐないわ。』

光子は何のことやら、よくは解らなかつたけれど、たゞ、娘が訊くまゝの返辭をした。

『左樣！　屹度？』

娘は光子のからだに近よつて、顔を胸のところに持つて行つて、見上げるやうに、光子の顔をみた。光子は今迄もよく娘がこんなことを自分にしたので、また、何時ものやうに、元氣がよくなつたり、機嫌も癒つたりして遊んで行くのではなかうふかと、やゝ愉快な氣持ちになりながら、

『何にも……。たゞ、房ちやんが可愛いと思つてるばつかりなの……。』

娘は默つて、顔をいよ〳〵胸のところに押し當てるやうにして、光子の手をしつかりと摑んでゐた。光子はまた變な此樣子に、暫時は、娘のするまゝに任せてゐたが、不圖、娘の啜り泣に氣づいたので、

『オヤ、房ちやん、泣いてるのね。あなたは……。どうしたの？　一體……。』と。肩に手をかけて、その顔を覗くようにした。

娘はこんどは顔を隱すやうに、自分の袂で被ひながら壁の方を向いて泣きじやくつた。

『房ちやん、泣いちや厭よ。どうしたの？　ほんとに困るぢやないの。』

光子は、ほんとうに困つたやうな樣子で、娘をみてゐた。暫時、娘はそのまゝで泣いてゐたが、やがて、泣き止むと、そろ〳〵と障子を啓けて、玄關へ降りた。

『かへるの？　左樣、ぢやァ、またね』

光子は、もふ一層早くかへつてくれゝば、いゝといふやうな氣がして、恁う云つたが、娘が泣き腫れて紅い、可愛らしい双瞼の邊りを見ると、又氣の毒な氣持ちがして、

『房ちやん、よくお顔を拭いて被入いな。何をそんなに泣いたか、お父さんにでも訊かれァしなくて？』

房は頷いて、復た長い振口から、紅い繻袢の袖が出るのも構はず、袂で眼のところを抑へ抑へ、屋外に出て行つた。が、娘は直ぐ其處から、木戸の方へは行かずに、反對の往路の方へ歩いて行つた。

……あんなに泣いた後で、直ぐ家へ行くのは、矢張り氣まりが悪いとみへる……。

暮れてゆく薄暗のうちに、しよんぼりとした娘の後姿を見送りながら、光子は、何のために娘が今日、泣いたのかは解らなかつたけれど、たゞ譯もなしに可愛想で、憐しくてならないといふ氣持ちがされたのであつた。

其晩、光子は折角、樂しんでゐたことも、娘の打ち萎れたあの有樣で、駄目になつて了つたので、彼女は何時ものやうに、湯錢に行つて、食事をすますと、珍らしく宵の中から臥床に入つて了つた。左樣して、翌朝は、ぐつすりと寢込んだ後の、よい心持ちで、眼覺めると……、今日は晝食に或邸に招ばれてゐることを思ひ出した。で光子は少し念入りに頭髪を結つたり、顏を洗つたりして、着物を着替えた。一番最後に光子は何時も仕舞つてある小抽出しを啓けて其中から襟止の小箱を取り出さうとした。が、其處には、水色絹のハンケチと、其他に何時も入つてゐる懷紙だの、鏡挿しだのゝ他には、何にもなかつた。……復た！……光子は今迄もう一度、二度、經驗したことのある或不思議な衝動に、直ぐ捕へられた。

『……たしかに入れて置いた筈だ。此處に何時でも入れて置いたのだ。そして此頃ちつとも、弄りはしなかつた……。』

それでも、念のために、と思つて、光子は、また他の抽出しを一々改めて索がしてみた。襟止は紫色のビロードの小箱に入つてゐて、七寶で櫻草を美事に細工したものであつたが何處にも、それは見當らなかつた。

『……何といふ……。まア此家はをり〳〵魔のさしたやうなことがあるのだ。こんな抽出しの中の品物までが紛失つて了ふのだもの……。』と思つたが、さて、光子はよく考へると、其小抽出しは、何時の程からか、鍵もかけずにあつたことに氣づいたのであつた。

『……矢張り、私の不注意からだつた。左樣だ、鍵がかゝつてゐなかつたので、それで盜られたのだ。けれど、誰人だらう？　矢張り此前と、又其前とも、みんな一つ人間に違ひないとす

ると、誰人だらうか？

光子は思はず、隣家の壁の方を睨んだ。壁の向側からは、今、やう〳〵起きたところらしい押し入れの戸をガタ〳〵させる音がきこえて來た。二階の騒々しい母親はまだ寢てゐるようだ。光子は、次いで、隣家の水道を無茶苦茶に流し出してゐる音をきいても、たゞ腹立しい氣持ちがした。……どうかしてあの婢を摑へて、左樣してあの母親とも、二人を散々謝罪らしてやらなければならない。うんと窘めてやり度い……。恁う考へたけれど、それは矢張り現場を摑へた時でなければ、詮方がない、現場を摑へる。――と、云つても午後丈は確かに毎日留守であることを知つてる、隣家の婢に對して、其爲めにまた此方の公務を迄缺いて、其現場を見屆けるといふことは、なか〳〵難かしくもある。……どうしてい〻のか光子は全く途方に暮れて了つた。

明い光、樂しい音、華やかな色彩、又は自分の是迄知らなかつた新らしい事物に觸れることが、光子には一番嬉しい感じを與へる時間としてあつたのだつた。彼女は其日も左樣した嬉しい樂しい時間の一日を經て後、復た露路の奥の寓に歸つて來た。

寓の中は何時に變らず自分を歡ばせるやうに、すべて整つてゐた。けれど、其處には一つ彼女の頭腦に復た蘇つて來た不愉快さがあつた。美はしい光澤と色彩と、温い貴い感じと、小さな、けれども精巧を極めた美事な櫻草の襟止は、今更のやうに大切に、惜しまれて、もう此家のうちには其品が無いのだ……。多分今頃は隣家の、あの女中部屋の押入の中の行李か何かの隅の方に押し込まれてあるに違ひなからう――と思ふと光子のこゝろは、何だかクサ〳〵として來た。つまらないと思つた。

……あ〻活動にでも行つて來ませう……

恁う考へると、彼女は其ま〻寓を出て、家主の處へ行つた。

活動の映畫は何れもおもしろかつた。

先づ最初に輕いデコ坊の漫畫のやうなものから、次いでお馴染のハム君や、デブ君か現れて大活躍、大滑稽を演じてみせた。

『私は活動もハイカラものはどうもね……』と先刻、出際には大分澁つてゐた内儀さんも、もう可笑くて堪らないといふやうに、をり〳〵、他人が吃驚するやうな大きな聲を出して、人の好さそうに笑ひ轉けたりした。娘も全く、きのふの容子とは變つて元氣づいて、面白さうに笑つて觀てゐた、光子は誰人にもまだ談してゐない、またうつかり談されもしない紛失物の爲にクサ〳〵として他人まで誘ひ出したのであつたが、みんなが恁うして歡んで觀てゐるのを見ると、自分もたゞ愉快な感じがした。

軈がて、活動寫眞は最後の大物である、或探偵風の筋で、全五卷に仕組まれてある映畫に移つた。そうしてそれは阿米利加種の寫眞なので、よくある筋ではあるが、或貴重な一國の寶が敵の手に渡つたり、味方の手に戻つたりして、其處に幾多の男女や、變化してゆく背景が、眼まぐるしいやうに現はれて、觀てゐる者にも可なりの忙しなさと又面白さとを與へた。

『……アッ。復た取られたわ。まア……。』と、娘は光子の膝の上に載せてゐる手に、力が這入つたり、拔けたりするかと、思ふと、

『あら否だ……。あんな風して……。オホ、ッ。』

などゝ、夢中になつて畫面の方に氣をとられてゐた。光子は、寫眞の方よりは、をり〳〵娘の左樣した無邪氣な容子に、遂、つり込まれて微笑んでゐた。

寫眞は、次第に場面を累ね、卷を追ふて、漸くそれ等、敵方の罪人等は捕縛されたり、自ら崖に投じたり、水に溺れたりして、其結末に近づいて來た。娘はもう、無邪氣な笑聲などを洩らして觀てはゐなかつた。

『まア、可愛想ねー。おばさん。あんな可愛い娘が縛られて……』

『可愛い娘だつて、惡いことをしたのですもの……當前よ。』

娘は、そつと光子の膝から手を離して、その顏色を窺ふやうな容子をした。光子は何氣なしに微笑みながら娘を見ると、娘は急いで顏を寫眞の方に向けて了つた。娘の顏色は薄暗い中ではあつたけれと、恐ろしく蒼ざめてみえた。たしかに先刻の程よりは、蒼くなつてゐる。と光子は思つた。內儀さんはたゞ一心に寫眞の方を觀てゐた。光子は何だか心配になつて來て、寫眞よりは娘の方をちよい〳〵と氣をつけてゐた。娘は、ぶる〳〵ッと身震ひをした。光子はふと、寫眞の方へ眼をやると——。綺麗な、併し、惡者の仲間の女が、今、刺されて死ぬところであつた。

『房ちやん。厭なの？　恐いの？　あんなところ觀るの……』

『……』

娘の顏はいよ〳〵蒼ざめて來たが、それでも一心に娘は觀てゐた。最後に、其最も惡い働きをした男と、女とが、廣い牧場のやうな處に伴れ出されて高い柱に手足を結つ付けられて、やがて、火をかけられやうとする。

『燒かれるの？　お母さん。え？』と、娘は小さな聲を出して、恁う母親の方に訊いた。

『あゝ、罰だね。惡いことをした……。』

內儀さんはさも感心したやうに、恁う云つた。娘はだん〳〵內儀さんの方にすり倚つて行つた。

寫眞は——其處に多勢の人々が集つて、整列した前を一人の僧侶が、その刑罰の柱の前に進んで、祈禱をし、十字架を切ると、やがて、其處に積まれた樹柴に火は點ぜられた。

『お母さん、歸りませう。歸りませうよ。』

娘は急に起ち上つて、母親の手を矢二無二引張つた。

『マア、どうしたんだねえ、此娘は……』と、內儀さんは驚いたやうに云ひながら、光子の方

を見た。

『あゝ、もうかへりませう。これでお終了ですから……』

光子は、たゞ、先刻から娘が、もう寫眞が面白いといふよりは、悲慘な感じのする場面ばかりになつて來たので、それで小さな頭腦には氣味も惡く、飽きもしたのであらうと、察してゐたのだつた。

歸る途々、娘は光子には一言も云はなかつた。左樣して頭が痛いと云つて、母親の手に縋つてやう〳〵歩いてゐた。

光子は、もうきのふから此娘の變な容子では大分、惱まされてゐるので、左樣してまた自分もいろ〳〵なことで、クサ〳〵してゐる場合であつたので、――其まゝ寓に歸つて來たのであつた。

それから三日ばかり、光子は外の急がしい用事に取り紛れて暮した。四日目の夕方、また光子は早く寓に歸つたので、家主の處へ出かけて行つた。あの晩ぎり、娘を見ないのが、また氣にも懸つてゐたのであつた。

『房ちやんは、どうしました？　あれから更張りね。』

光子は表の帳場の處へ上つて、今、頻りと帳面を前に、算盤を彈いてゐる内儀さんに恁う訊いた。

『あゝ、被入いまし。』

と、内儀さんは輕くお辭儀をして、其手を休めると、

『まァね、房江はあれから病氣になりましてね。毎日熱が高くて困りますんですよ。』

『へえー、まァ、一寸も知らないで……、左樣ですか、何處に寢んで被入るの？』

『あの奥座敷ですがね。貴女、熱が高いので……でもお構ひでなくば……』

光子は内儀さんの後から、奥の離座敷に入つて行つた。

八疊の座敷の雨戸を半分潜つて、夕暮れの薄白い光線と、弱い電燈の灯かげとは、屏風を挙廻しにして、白いシーツの上に横たはつた病人の部屋を、一層陰氣にしてみせた。娘は黒い頭髪を亂して、低い枕の中に、今、スヤ〳〵と眠つてゐる。其顔色は熱にほてつてゐる爲か、好い光澤をみせて、頰の肉も左樣落ちてはゐなかつたけれど、何だか、急にあの娘がこんな、病床に横たへられて了ふやうになつたのかと思ふと、光子は一方ならず可憐しい氣持ちがして、ぢつと其枕元に近く倚つてゆつた。

あんなにして活動なんぞに伴れ出したのが、惡かつたのではないかしら、氣の毒なことをして了つた……光子は恁んなことを考へてゐた。娘はウーツと、呻唸の聲をたてゝ、ガクリと枕から頭を外した。光子は、そつと、兩手で頭を持ち上げるやうにして、枕を直してやると、娘は復たスヤ〳〵と可愛らしい寢息をたてゝ眠入つた。

陽はとつぷりと暮れて、電燈の灯が廣い部屋の中に、薄ぼんやりと弱い光を投げてゐた。冷たい風が障子の隙間から、スーツ〳〵と、氣味惡く光子の脊中の方に忍んで來る。光子は起つて其處の雨戸を潜つて了はふかと思つたけれど、夕暮時刻の忙しさで、内儀さんも誰人も、今其室にはゐなかつたので、矢張り彼女は其枕元に坐つてゐた。

『あッ、あーッ苦しい〳〵。』

突然、娘は恁う叫んだ、光子は驚いて、其顔を覗いたが、何のこともなくスヤ〳〵と眠つてゐる。あゝ、熱に浮かされるのだ可愛想に……恁う思つて、光子は氷嚢に手をやつて、温んでゐる中を取り換えやうとした。

『いゝえ、いゝんです〳〵。それは私が惡いんですもの……私が、私が惡いことをしたんですから……』

娘は復た恁う云つた。左樣して白い小さな手を出して、何か哀願でも乞ふやうな手振りをした。光子は氷嚢に手をかけたまゝ凝乎としてゐた。

『……けれど、燒かないで……、燒かれるなんて……。私は、あんな酷い目に……でも私は罪人ですわねー。……おばさん許して下さい〳〵。ねーおばさん……』

娘は兩手を高く延ばして、氷嚢の邊りをガサ〳〵と搖つた。冷え切つた光子の手尖に、其熱つた手が強く當つた。光子は思はず手を引止めて、膝の上に堅く置いた。光子のからだは竦だやうになつて動かなかつた。娘は尙も云ひ續けた。

『もう、もう爲ませんわ。屹度。だから許して……。でも、私は彼品が、彼品が堪らなく欲しかつたんですもの……。伊達卷も……そしてとう〳〵盗つたんです……。綺麗な櫻、さくら草……。』

思はず、光子は起ち上つた。

娘は、さも疲れたやうに、グタリと枕から頭を辷らして、白い、シーツの中に熱つた顔を埋め、小さな口をやゝ開いて苦し相に呼吸を吐いてゐた。

……內儀さんか誰入か呼んで置かう……。と、思つたが、光子は、もうそんな勇氣はなかつた。起上ると、何物かに自分の襟がみを摑まれてゞもゐるやうな、怖しさと氣味惡さとを感じて、ふら〳〵と部屋を出た。ほんとうに、光子は何物か取附いてゐるやうな氣持ちがして、其枕元から其室を出る迄、自分の背後を見ることも能きなかつた。其癖、絕へず背後ばかりが氣になつた。彼女は全く、何物かに追ひかけられるやうな、そして、逃がさないぞといはれたやうな感じのする中から、やう〳〵の念で、其處を出て來たのであつた。

＊　＊　＊

『……けれど、私は矢張り、あの娘を許して、そして今迄通りに可愛がつてやりませう……。』

翌朝、まだ起き上らない床の中で、恁う光子は考へた。

娘が、夕方寓の前に立つてゐて、自分を發見た時のあの恐怖と驚愕とに閉された、妙な變つた容子から、又活動寫眞の映畫で、惡者仲間の娘や女達が慘殺されてゆく、勸善懲惡の諷刺

ものに依つて、其小さな心理が、自然の良心に苛まれてゆく變狀、それから、あの氣味の惡い念をさせられた譫言。

長い間、光子のこゝろに……。鼠の仕業か、自分の不注意か失念か、或は他人の惡戲……。結局、故意あつて爲る憎らしい人間の仕業であらう……と、獨斷めして置いた、此一つの謎は遂に、遂に解かれたのだ。

光子は、ゆふべ一夜、まんじりともしないで、此謎に就いて、考へ通したのであつた。左樣して憎むべき者は全く、あの娘だと思つた。今迄の自分の愛撫。それも自分にはまだ嘗つて感じたこともないやうな、又實際に示したこともなかつた程な、愛憐のおもひを數々垂れてやつたのだ。それを、すべて〳〵あの娘は、また今迄に自分が受けたことも無いやうな慘忍さを以つて、それに報ひてくれたのだ。何といふ慘ましい酷い惡戲であらう！　光子は矢も楯もならぬ程に、娘を憎んだ。裏切られた自分のこゝろを憐んだ。左樣して、此報ひを如何してやらうと思つた。

が、彼女の良心は、其處で一歩踏み止つた。彼女は考へなければならなかつた。ほんとうにもう、一歩進まなければならない。もふ一歩も二歩も、ずつと、大きく超へなければならない。と考へた。

あの娘の境遇、あの娘の親達の談。そうしてあの娘自身には、善い性質の多く含まれてゐることも、私はみんな知つてゐるのだ。よく〳〵考慮へると、あの娘は可愛相なのだ。そして、そんなことはこれから力を盡したら、愈してやることは能きるのだ。と、彼女は考へた。

『左樣だ。私は許してやりませう。快く、何もかも、忘れてやりませう……。』

一夜の、寢苦しい床の中で、光子が考へ極めたのは、これであつた。左樣して、一日も早く娘の病氣が――、あの譫言丈でも云はいやうになつて呉れゝば、いゝと希つた。

大正七、一二、二五。（完）

文學博士萩野由之先生序文
文學博士芳賀矢一先生序文

内大臣大勳位侯爵松方正義閣下題字
元帥陸軍大將子爵川村景明閣下題字
大宮司子爵川室戸和光閣下題字

（新刊）

太神宮史

總クロース綴金文字箱入
菊版紙數四四〇頁
壹部金參圓内地送料拾貳錢

今や世界思潮の變遷は最も注目すべき堅急の一問題にて我日本國民は國民道德の立脚地を鞏固にし益々國民性の發揮に努めねばならぬ今や國民教育が大々備つて居る樣であるが其精神に於て益々徹底なさしめねばならぬ、而して之れが中心たる伊勢神宮は唯一の君民一致崇敬すべき目標である、現今國民教育上大神宮に就て智識をどれだけ授けられつゝあるや、本書は智識階級の需要に促され發行したる無二の「太神宮史」なり、從來伊勢神宮を中心として歷史的に之れを叙述したる著書なく本書は蓋し此種の嚆矢である。

一般帝國民は本書に依り、忠君愛國、大和魂、國民道德の立脚地を鞏固にすべく、崇神の精神を養ひ我國體の精華を發揮に努むべき自修讀本にて必携書なり、殊に教育者は倫理教育上の唯一の參考書、軍人は元より特に壯丁教育に缺くべからざる精神修養書、神職は神社に奉仕する須要なる必讀書なり。

口繪　皇大神宮、豐受宮、御神寶寫眞三十餘種（現今宮城内へ寫眞器携帶ヲ禁ジ、其他ラレアルモ先々謹寫セルモノ也）

遷宮諸祭典圖挿入

東京赤阪臺町四一・三重縣津市西裏町
弘道閣
振替東京三一五三七番・振替大阪四九六九五番

大正八年七月二十五日印刷
大正八年七月三十日發行

三角の眼奥附

定價金壹圓貳拾錢

著作者　百瀨しづ

三重縣津市西裏町千百三十四番地
發行者　服部英雄

東京市京橋區築地二丁目三十番地
印刷者　川崎佐吉

發行所　東京市赤坂區臺町四一
三重縣津市西裏町
弘道閣
振替東京三一五三七番
振替大阪四九六五九番

不許複製

475
585

落